

## 9 長野川の水奉行遺跡

天正 10 年の高松戦役で、羽柴秀吉らは布陣した石井山の南麓の蛙ヶ鼻から堤防を築き、足守川の支流の立田川をあふれさせることで高松城を孤立させることに成功しました。

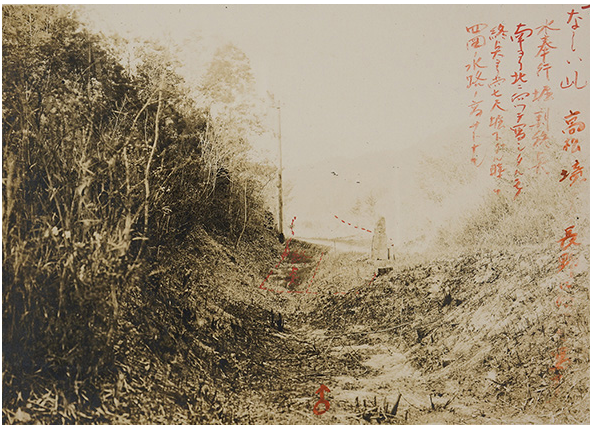
しかし古い戦記には、高松の平野から山並みで隔てられ、北方を流れている長野川（別名、鳴谷川）の水も合流させて、水攻めの水量を増やす試みがなされたことを記しているものもあります。

水攻め堤防についても、現在では土地の形状の精密な調査から、城の周囲を冠水させるには、これまで考えられていたよりも小規模なもので十分であったと考えられることが多いし、長野川の水引きの伝承についても、標高差があまりにも大きいことから、城兵を威嚇する効果はあったにせよ、当時の技術と限られた日数では実現は困難であったとする意見が出されています。こうした工事が何を目的として、どのようにして、どこまで行われたかについては、これからも論争が続くと思われますし、今後も新しい研究が出て明らかにされて行くことが期待されます。

いっぽう高田馬治は、長野川の水を合流させる開削工事を指揮したものの、本能寺の変が起こって秀吉と毛利方との間で講和が成立し、工事の完成が間に合わなかったために、自責の念に駆られてその場で自刃した一人の武将（水奉行）に深く心を惹かれ、長野川の遺跡の調査を行っていました。昭和 14 年から翌年にかけては流域の岩が庭石に利用するために持ち去られることが起こっているのに心を痛め、昭和 4 年に城址と築堤遺構の史蹟指定を申請したとき協力を惜しまなかった文部省の調査官の上田三平と連絡を交わし、高松町に隣接して長野川の流域がある馬屋下村を通じて翌年の追加指定への申請を進めました。

長野川を堰き止めようとした堰堤とされる遺構から山裾を南下すると美しい松林があり、ひととき大きな松樹のそばには水奉行の供養祠が設けられていました。大正 3 年に落雷で枯死したこの松の一部で、高田馬治が保存してきたものが埋蔵文化財センターの所蔵になっており、かつての姿を思うよすがになっています。

長野川の水奉行遺跡は昭和 39 年 12 月に岡山県の史跡に指定され、現在に至っていますが、この直後にも沿岸の一部が道路工事で損傷することがあり、高田馬治はそれを報じた新聞の記事を読んで心を痛めています（本書 77 頁）。



なしい札（峠）の付近



水奉行松の切株

長野川、水奉行遺跡の調査

昭和 14 年頃

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/57-1 ~ 11）

長野川（鳴谷川）遺跡の史蹟指定のため、高田馬治は馬屋下村長の狩屋荒太郎氏らと流域を歩きました。そのとき撮影された写真 11 枚が保存されており、朱字で詳しい状況の書き入れが施されています。展示ではその中の 7 枚をパネルで紹介しました。写真は、なしい札（峠）から水奉行松の付近を通り、北上して長野川（鳴谷川）の堰堤の箇所へ至るように続いています。



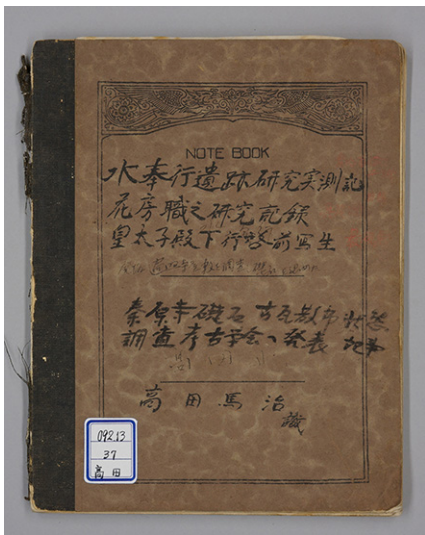
高田馬治と  
狩屋村長



長野川(鳴谷川)



堰堤の付近

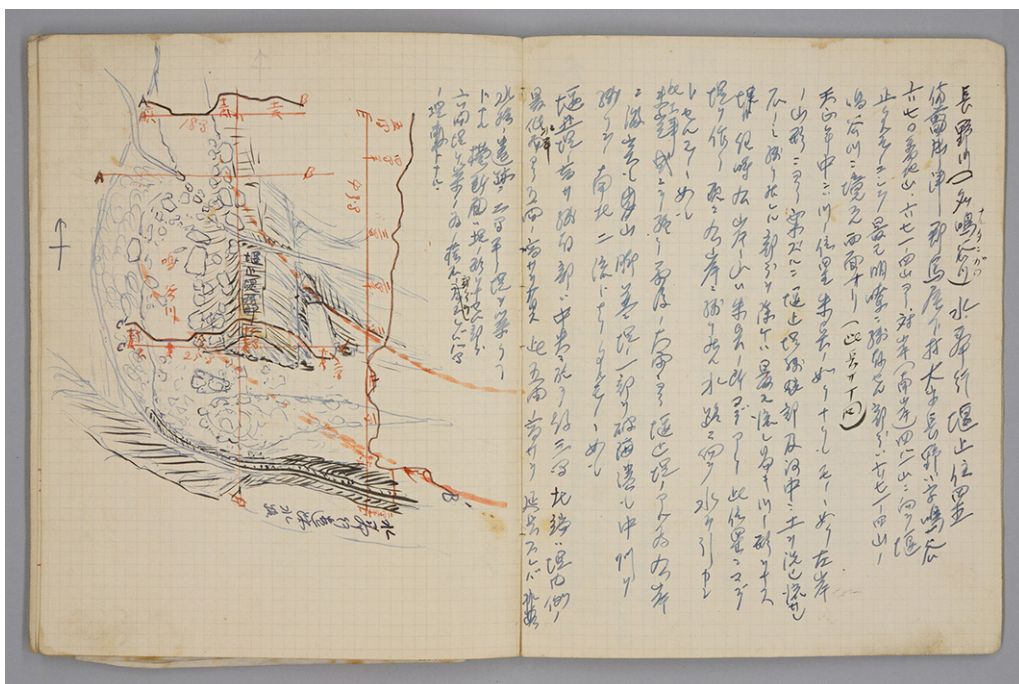
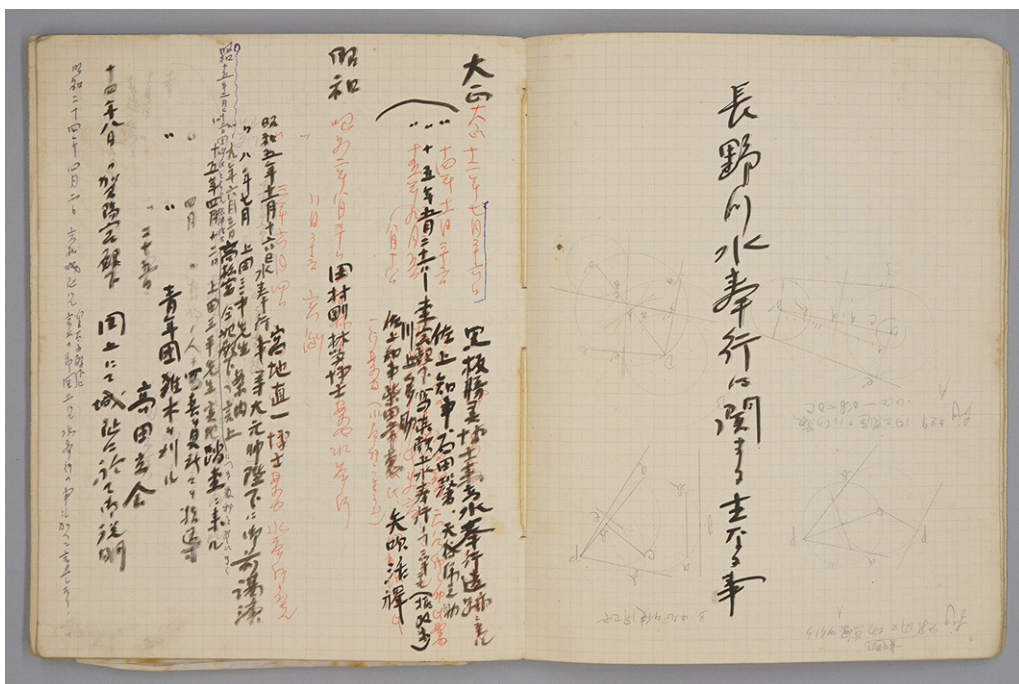


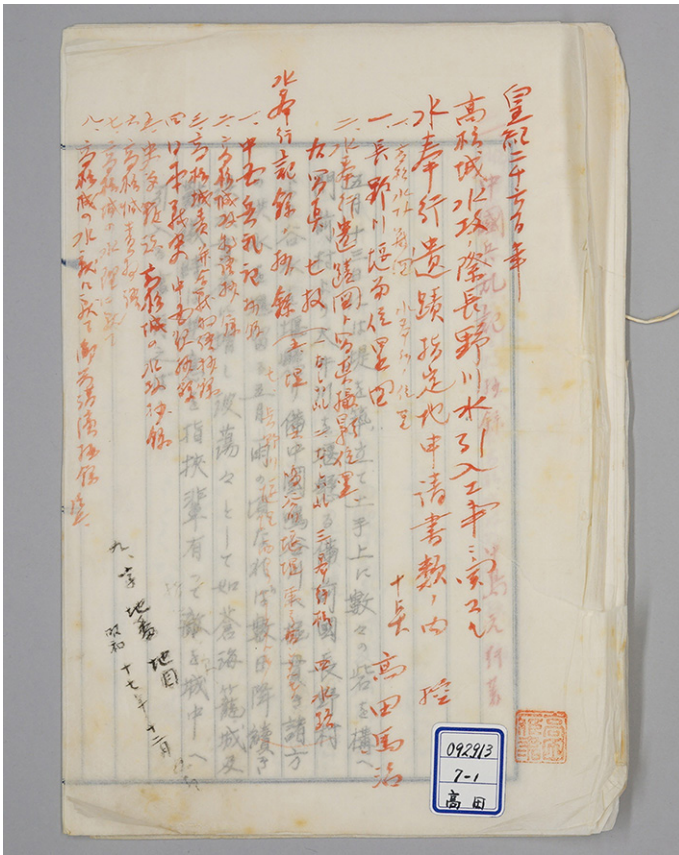
9-1 高田馬治「水奉行遺跡研究実測記・花房職之研究記録・秦原寺礎石古瓦散布状況調査考古学会へ発表記事」ノート

作成年不詳 20.4cm × 15.8cm

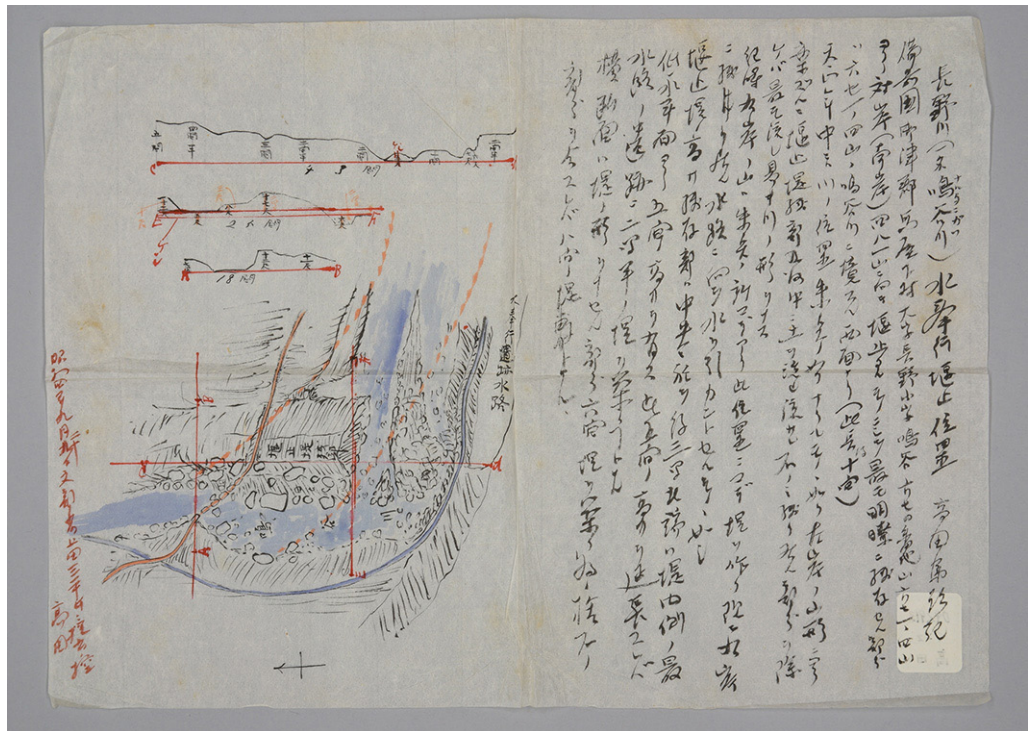
岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/37）

さまざまな時期に内容を書き足されてきたノートですが、水奉行遺跡の箇所は現地調査（昭和14年頃）の記録とみられます。その中から黒板勝美、柴田常恵、矢吹活禪、上田三平など、この遺跡に関わった文部省の史蹟指定調査員や、佐上岡山県知事、高松宮、賀陽宮などの要人や、田村剛、宮地直一などの専門家の名前を書き出している頁と、長野川の現地調査記録の頁を掲出しています。

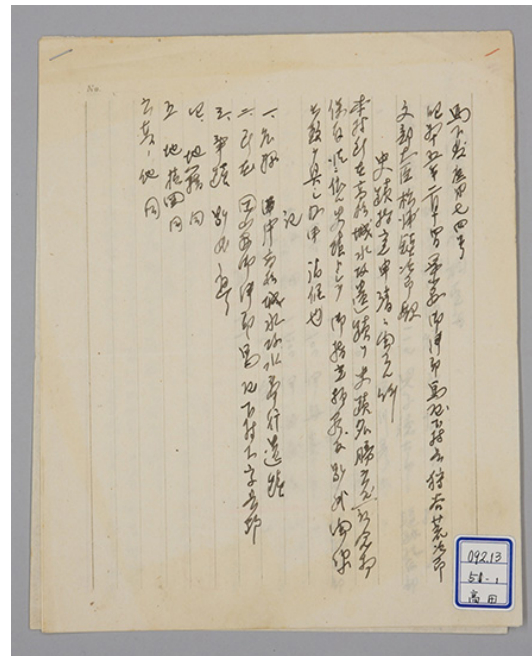
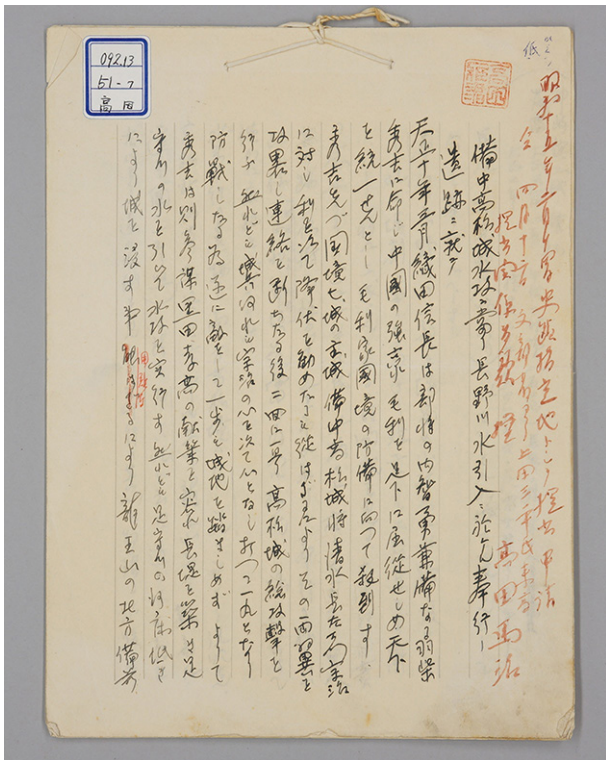
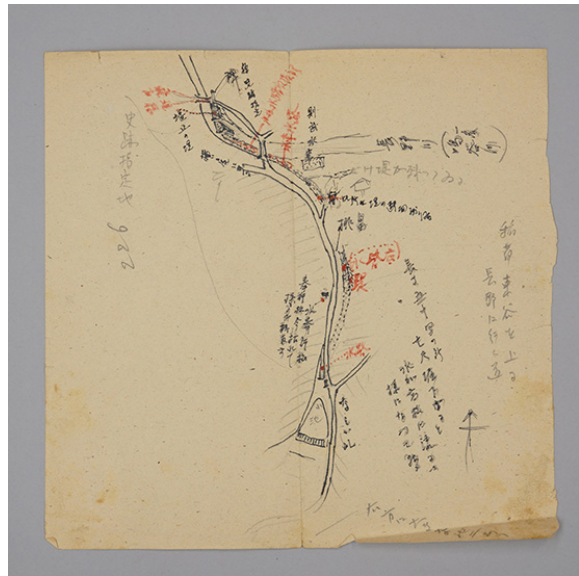
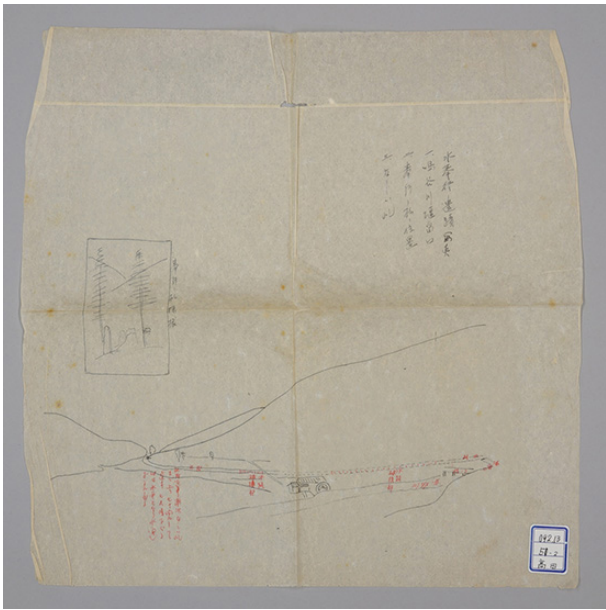




9-2 高田馬治「高松城水攻ノ際長野川水引入工事ニ関スル水奉行遺蹟指定地申請書類ノ内十点 控」昭和15年 24.4cm × 17.0cm  
岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.913/7-1）  
長野川の水引き入れ工事における水奉行の遺跡の史蹟指定申請で提出した書類の控えです。表紙には後の追記とみられる朱字で、図3枚、写真7枚、参考書8点を提出したことを記した後に、水奉行遺跡の関係記録の名前が列挙されています。  
黒字で書かれている次の丁からの部分が、この書類の内容で、水奉行遺跡に言及している関係の記録（『中国兵乱記』、『備前国佐柿常円入道物語』、『高松城責并合戦物語』、参謀本部『日本戦史 中国役抄録』、瀬川秀雄「高松城の水攻」（『史学雑誌』掲載論文）、『高松水責記』（伊丹家所蔵写本）、原秀四郎「高松城の水理に就いて」（『史学界』掲載論文）、高田馬治「高松城の水攻に就いて」（御前講演の稿）の抄録が集められています。



上掲の綴りには、長野川遺跡の堰堤の場所を詳しく記した1枚の図(24.4cm × 33.0cm)が挟み込まれています。左隅に昭和4年9月に上田三平氏へ提出の控えである旨が朱字で記入されており（日付は9日から20日に訂正）、そのときに長野川遺跡も申請したものの指定には漏れていたのか、あるいは昭和15年の申請の日付を書くべきところを珍しく誤記したのか、判然としません。



9-3 高田馬治「鳴谷川（長野川）水引入水奉行に関する書類」から

昭和 14 ~ 15 年頃

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/51-2, 3, 1, 7）

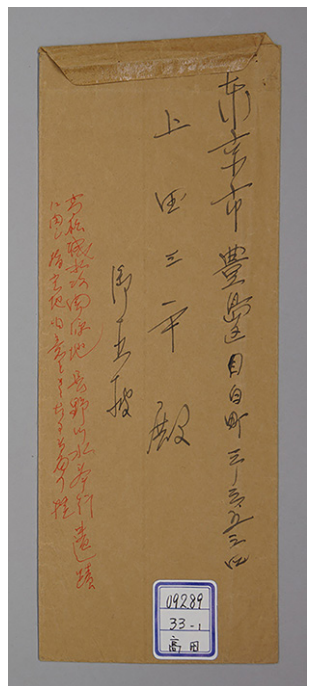
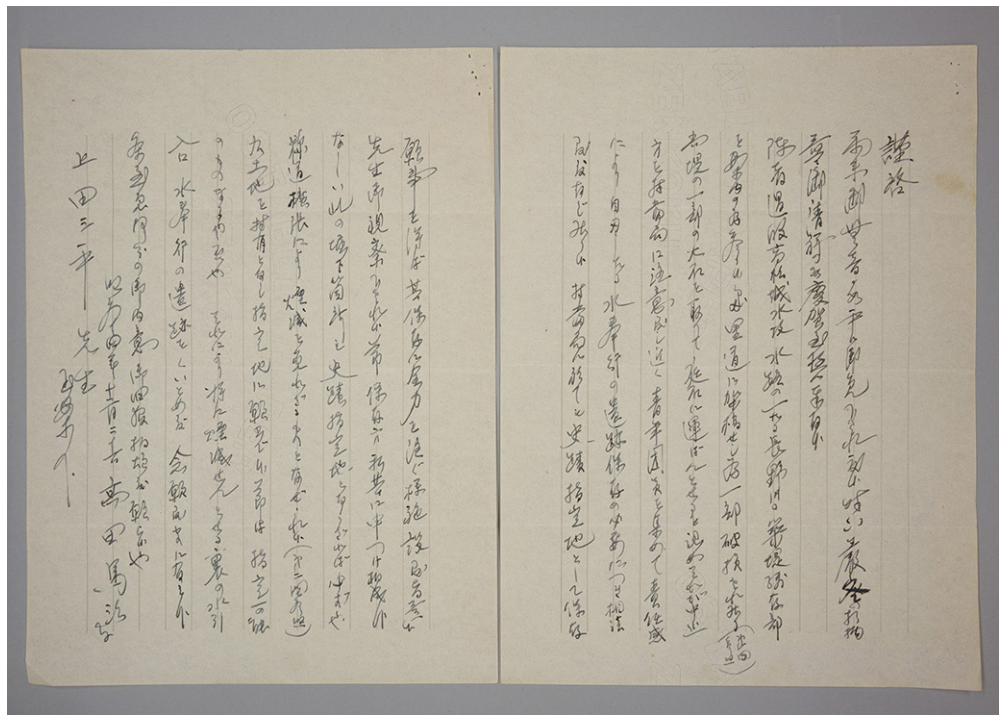
（左上）長野川遺跡のスケッチ 32.2cm × 31.0cm

（上右）長野川遺跡の平面図 19.7cm × 19.1cm

（下左）昭和 15 年 2 月 14 日に提出した史蹟指定申請の書類の控えです。それを受けて 4 月 12 日に上田三平が現地を訪問したことも書き記されています。

24.0cm × 17.7cm

（下右）馬屋下村長の名前で文部省へ提出された史蹟指定申請書の控えとして書き写したものです。 22.4cm × 17.8cm



謹啓  
 年来御無音の処平に御免下され度候 時下嚴冬の折柄  
 益々御清祥の御慶賀至極に奉存候  
 陳者過般高松城水攻水路の一たる長野川の築堤残存部  
 を案内の為参り候処里道に架橋せし為一部破損され居る(次図参照)  
 当堤の一部の大石を取つて庭石に運ばんとせるを認めそれが中止  
 方を村当局に注意致し近く青年団員を集めて責任感  
 により自刃したる水奉行の遺跡保存の必要につき相談  
 致度存じ居り候村当局に於ても史蹟指定地として保存  
 願事を得ば其保存に全力を注ぐ様施設致旨専一候  
 先生御視察下され候節保存方私共に申つけ相成候  
 なしい札の堀下箇所も史蹟指定地とならざれば必ずや  
 県道拡張により湮滅を免れざる事と存ぜられ候(第二図参照)  
 此土地を村有となし指定地に願出で候節は指定可能  
 のものなるや否やそれにより將に湮滅せんとせる裏の水引  
 入口水奉行の遺跡をくいとめ念願致処に有之候  
 条至急何分の御内意御回報被煩度願上候也

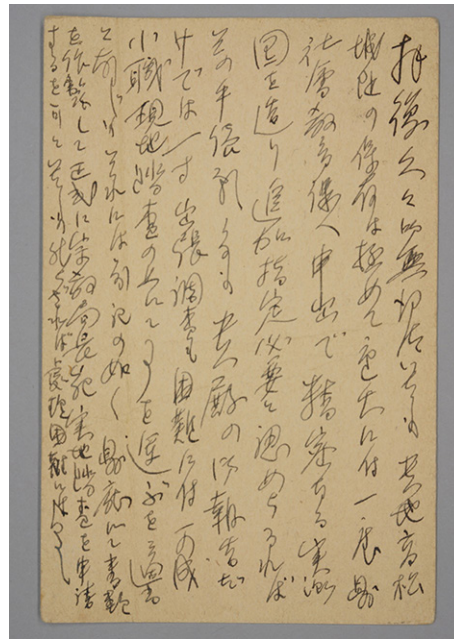
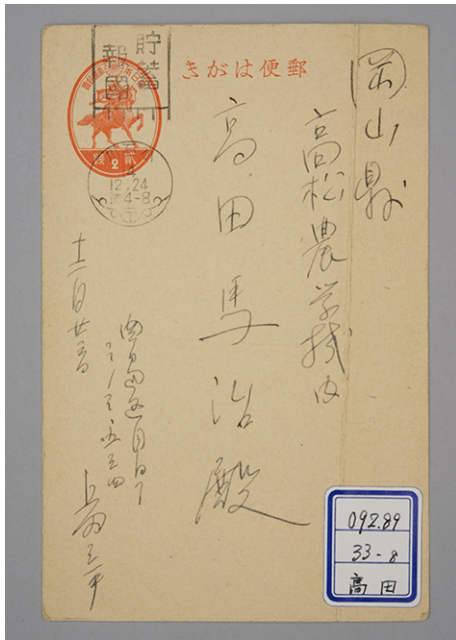
昭和十四年十二月二十一日 高田馬治拜  
 上田三平先生  
 玉案下

9-4 高田馬治から上田三平へ出された書信の控え

昭和 14 年 12 月 21 日 23.5cm × 17.7cm 便箋 2 枚および封筒

岡山市立中央図書館蔵(高田文庫 092.89/33-1)

長野川遺跡の史蹟申請にあたり、高田馬治と上田三平の間で交わされた通信です。川原の石を運び出す人があるのを嘆き、破壊を防ぐには史蹟への指定が必要と考えているものの、それが可能かどうかを上田三平に尋ねています。



拝復久々御無沙汰いたし候其地高松  
 城址の保存は極めて重大に付一応県  
 社会教育係へ申出で精密なる実測  
 図を造り追加指定必要と認めらるれば  
 その手続願出の前貴殿の御報告だ  
 けでは一寸出張調査も困難に付可成  
 小職現地踏査の上にて事を運ぶを適當  
 と存じ候それには別記の如く、県庁にて書類  
 を作製して正式に宗教局長宛実地踏査を申請  
 するを可といたし度然らざれば処理困難に付申上候

岡山県  
 高松農学校内  
 高田馬治殿  
 豊島区目白□  
 □□□・五三四  
 十二月廿三日  
 上田三平

9-4 上田三平から高田馬治への返信

昭和14年12月23日 14.0cm × 9.0cm 葉書1枚

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫092.89/33-8）

高田馬治からの問い合わせに対して早速（翌々日の日付）、上田三平から返信が出  
 されました。葉書の紙面いっぱいには要点が書かれています。「高松城址の保存は  
 極めて重大」とした上で、上田自身が現地踏査をして事を運べるように、精密な  
 実測図を作成した上で、岡山県の社会教育係を通して史蹟指定を所管していた文  
 部省の宗教局へ実地調査を申請するようにアドバイスしています。

（右頁）9-4 高田馬治から上田三平へ出された書信の控え

昭和15年6月10日 24.0cm × 17.7cm 便箋4枚

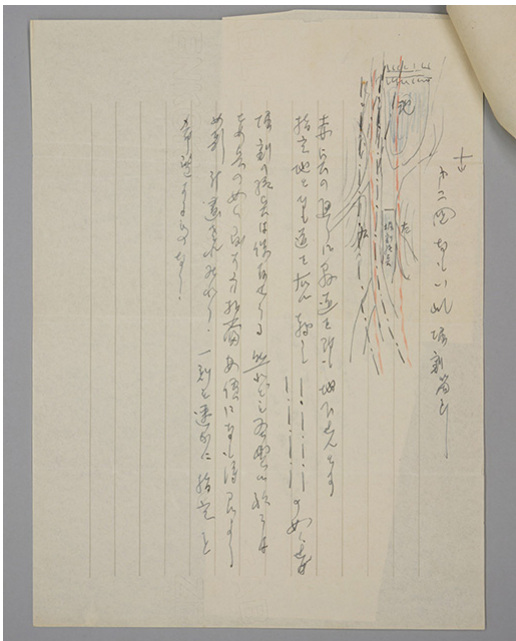
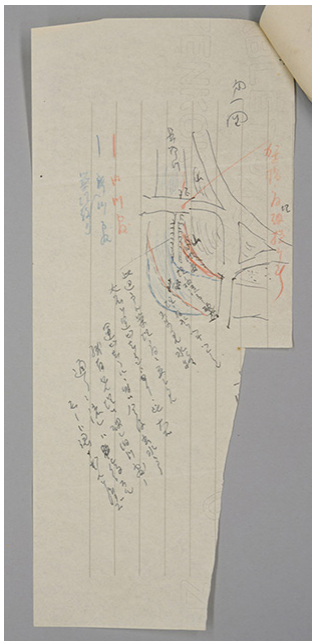
岡山市立中央図書館蔵（高田文庫092.89/33-2）

これまでのやりとりから約半年後に、公務で多忙の中を、申請に向けて書類を準  
 備している様子を説明し、なしいれにかかる場所の道路の付け替えをめぐる構想  
 が述べられています。判読できていない箇所が所々にあります。



抄語  
 時下梅雨の候と相成候も中国地方は降雨なく農民何れも憂い沈み居り候此時に当り先生には益々御清栄斯界の為東奔西走を続けられ候処為御国真に感謝至極に奉存候  
 陳者過般御命相成候高松水攻水奉行の遺跡写真(七枚)(図解は写真の裏面に記し置き候)撮影候ひしに出来よからず更に青年団員のかり出しをなして種々手配致し写しかへ仕りやつと此程別紙の通りのもの出来候甚だ延引送付仕り候様御覽下され度候  
 当水奉行事績に関する書類の写しは何れ後より御送り申べく何分公務多忙真に寧日なく致居り候為め  
 思ながら延引仕り候処□□御有し下され度願上候右御報御□とのみ如斯に候何分とも指定地に致す様御尽力下され度奉願上候  
 皇紀二千六百年六月十日認 高田馬治拜  
 上田先生  
 玉案下

此水奉行事績の寫しは書類の何れ後より御送り申べく何分公務多忙真に寧日なく致居り候為め  
 思ながら延引仕り候処□□御有し下され度願上候右御報御□とのみ如斯に候何分とも指定地に致す様御尽力下され度奉願上候  
 皇紀二千六百年六月十日認 高田馬治  
 上田先生



拜啓

時下梅雨の候と相成候も中国地方は降雨なく農民何れも憂い沈み居り候此時に当り先生には益々御清栄

斯界の為東奔西走を続けられ候処為御国真に

感謝至極に奉存候

陳者過般御命相成候高松水攻水奉行の遺跡

写真(七枚)(図解は写真の裏面に記し置き候)

撮影候ひしに出来よからず更に青年団員の

かり出しをなして種々手配致し写しかへ仕りやつと此程

別紙の通りのもの出来候甚だ延引送付仕り候様御覽下され度候

当水奉行事績に関する書類の写しは何れ後より御送り

申べく何分公務多忙真に寧日なく致居り候為め

思ながら延引仕り候処□□御有し下され度願上候

右御報御□とのみ如斯に候何分とも指定地に

致す様御尽力下され度奉願上候

皇紀二千六百年六月十日認 高田馬治拜

上田先生

玉案下

御返戻下され候地図二枚確に落掌仕り候

乍延引受領の旨申上度如斯に候也

第一図

第二図

なし

なしの掘割箇所

赤点の通りに□道を致し地下せんとす

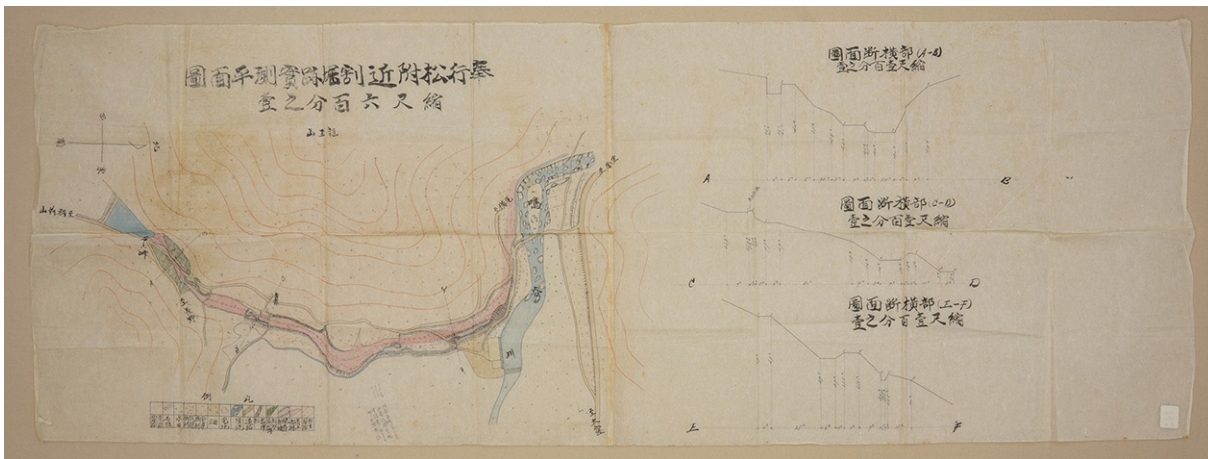
指定地となし道を右に移し□□□□の如くせば

掘割の残点は保存せらる然れども□□に頼らば

赤点の如く致す□□□安価になし得るにより

如斯計画され居れり。一刻も速かに指定を

希望するものなり。

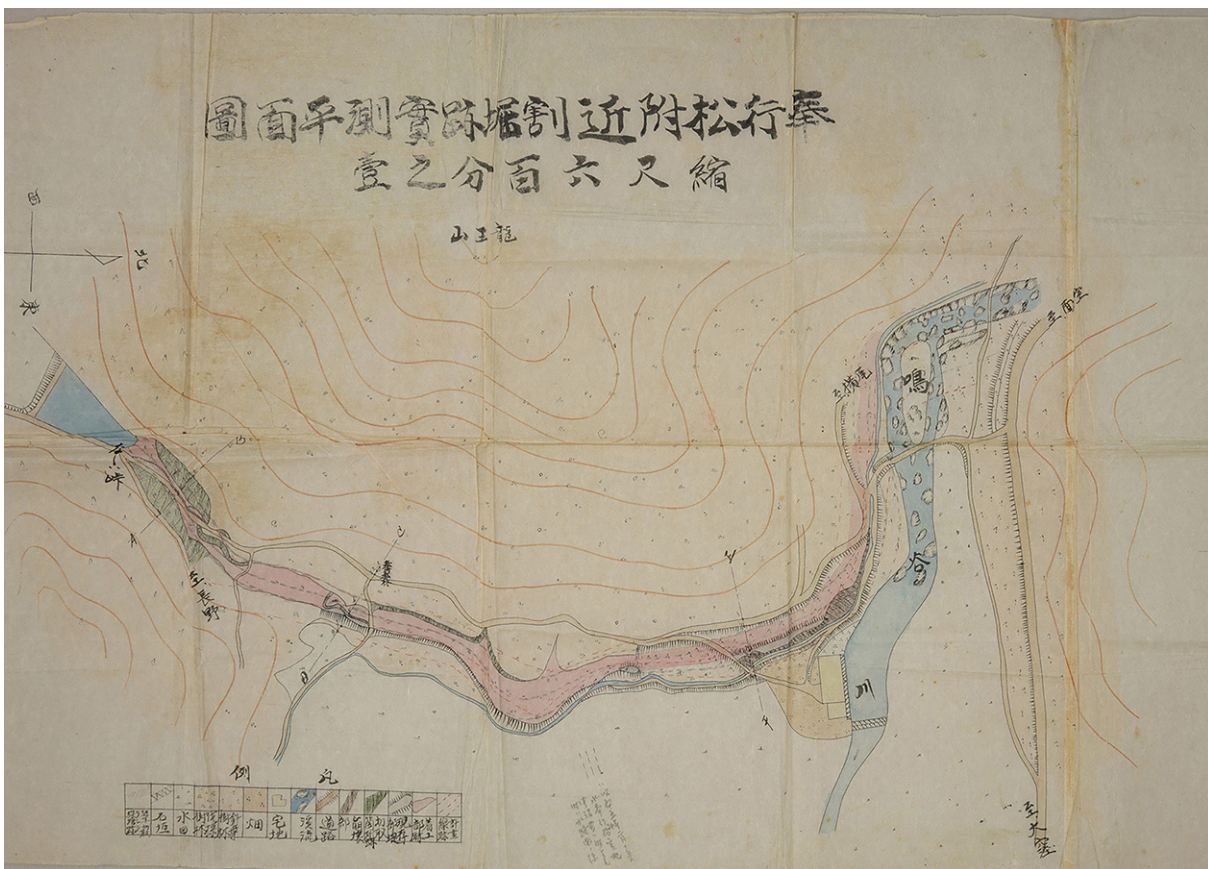


9-5 高田馬治「奉行松付近割堀跡実測平面図」

作成年の記載なし 53.8cm × 148.8cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/15-2）

奉行松付近の様子がよくわかる図ですが、昭和15年2月の史蹟指定申請にも添付した図であることが、左側の図の下の中央に小さな字で書き入れられています。



9-5の左側の部分

ピンク色の箇所を掘削し、右側（北側）を流れている長野川（鳴谷川）の水を、堰堤で付け替えて高松城の方面へ通そうとしたものと推定しています。なしい峠（峠）付近のA-Bと、奉行松付近のC-Dと、川に近いE-Fの地点で実測された地形の断面が、図の右側（上掲図参照）に記されています。



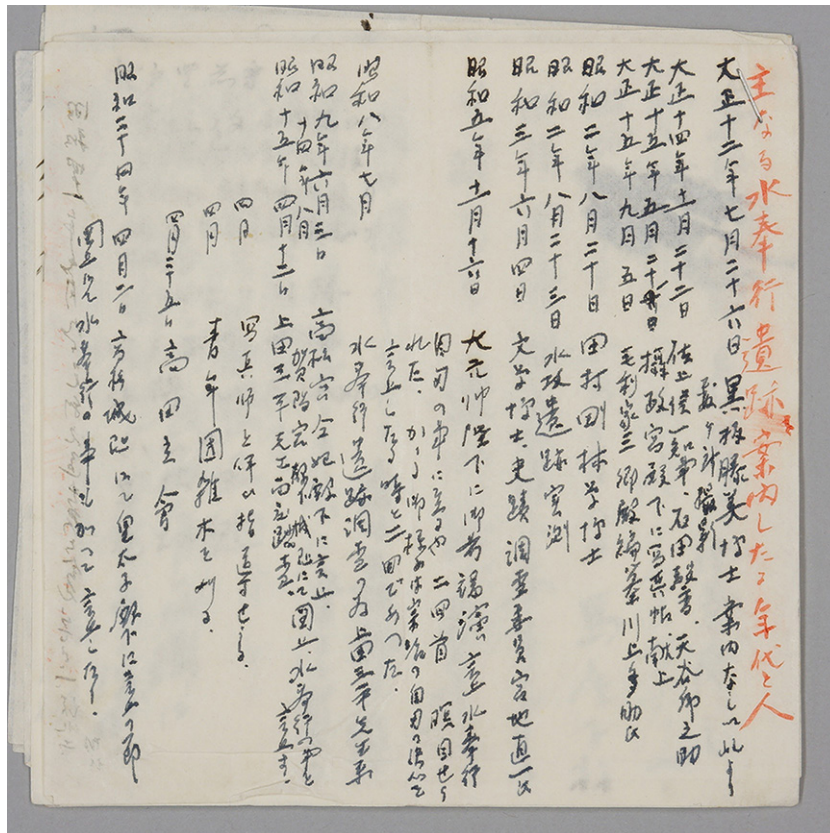
9-6 水奉行松（メモと木片2点）

作成年の記載なし

（メモ）岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.913/7-10） 12.0cm × 12.0cm

（木片）岡山市埋蔵文化財センター蔵（高田馬治資料 1） 長さ 34.3cm、16.0cm

大正 3 年 7 月に落雷で枯死した水奉行の松を、高田馬治が記憶をたどって描いた図と、彼のもとで保存されてきた焦げた松の木片です。



長野川水奉行遺跡を訪れた人々

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.913/7-10） 12.0cm × 12.0cm

展示はできませんでしたが、上左に掲出した 9-6 のメモ紙の別の 1 枚を紹介します。本書 54 頁に掲出した 9-1 のノートとあわせてみると、この地を訪れて史蹟指定に尽力した多くの人々のことがわかります。

## 10 清水宗治

戦前の尚武の価値観の中で、高松城址の保存活動において大きな役割を占めていたのは、講和の条件として部下の命に代えて自らの身命を捧げた清水宗治と、彼とともに自刃した将士に対する顕彰でした。戦前・戦後を一貫して学問的見地から史蹟の保存を訴えてきた高田馬治にとっても、清水宗治は敬慕すべき存在であり、御前講演の中でもその挙を大きく讃えたのでした。

こんにちの史跡や文化財の考え方とは少し異なる点があるかも知れませんが、由緒ある古蹟や古器物を保存しようとする活動は古くからあり、江戸時代においても識者の間に一定の広がりをもっていました。しかしそれらには、歴史上に名前をとどめる人物の顕彰を通じてその人の精神や事績を後代まで残し、伝えていこうとする動機から出たものが多くありました。由緒あるものの顕彰とそれを通じた精神の感化を目的とする保存は、私たちの動機に広く根ざすもので、現在でもその意義を失ってはいません。

しかし、明治30年代頃から近代の歴史学を学んだ専門の学者の間で広がってきたのは、古蹟や古器物を、その時代の社会を理解し、歴史を知るための手がかりとする考え方です。それらを歴史研究のための資料として用いるにあたっては、わずかな手がかりであっても見逃さずに捉えて、そこから遠い過去の時代を再現していく努力に耐えうる状態であること、つまり、資料のありのままの現状を変えることなく、そのままの状態に保存していくことが、後世の人々のためには大切なこととされるようになって行きます。

備中高松城の場合は、忠臣・清水宗治を顕彰し、その記憶を伝えていくことが、明治期に史蹟の保存を始めた人々の間では強い動機になっていました。その意味では明治42年の首塚の移転も、宗治の精神を受け継ぎ、その記憶を朽ちさせないようにする動機から発したことであり、以後も宗治をめぐる行われてきた数々の行事や活動は、地域の人々による高松城址の保存事業の中で重要な位置を占めて行きます。

この首塚については、『中国兵乱記』などの記述にもとづいて、それが清水宗治のものである蓋然性が高いとする論文を『史学雑誌』に発表した瀬川秀雄氏と、これに反論した山陽新報記者の早田元道氏との間で論争が行われましたが、高田馬治は瀬川博士の論文を書写して丁寧に目を通しています。

昭和8年には高田馬治を含む高松町の人々が山口県を旅行し、宗治の自刃の後、小早川家に預けられていたために戦役を免れ、清水家を相続した次男の景治が父の菩提を弔うために建立した清鏡寺や、彼の子孫が建立した正義霊社を訪問したほか、毛利公爵と毛利家旧臣の子孫と交歓を尽くしました。そして昭和10年には当時の清水家の当主であった忠俊氏と、清水家の家老を務めてきた難波氏の子孫の黒川正太郎氏を高松に招き、自刃の日である6月4日に城址本丸跡の首塚の前で墓前祭を行っています。その時はまだ少年であった清水忠俊氏と高田馬治の交友は、終生にわたって続きました。

昭和24年には岡山県久米郡弓削町に清水家の別の末裔である清水紅夫氏を黒川正太郎氏、清水忠俊氏ともに訪ねて墓域や屋敷跡を調査しており、翌年にはその家族を高松に招いて町長など町の要人とともに撮影した写真が残っています。

昭和31年には、明治42年の首塚移転の後に石塔が陥没し、備前焼の瓶（甕）が破損したため、以後埋納物を自宅で保管してきた和氣房右衛門氏の孫の弘氏のもとで遺物を調査し、拓本をとりました。そして翌年には文部省の承認を得て首塚の地下にコンクリート製の設備を設け、骨片などをガラス瓶に密封するなどして恒久的な保存措置を講じた上で、高松農業高校土木科の学生たちの手伝いで埋納物を埋め戻し、招待した清水忠俊氏や町の関係者とともに鎮魂祭を挙行了しました。

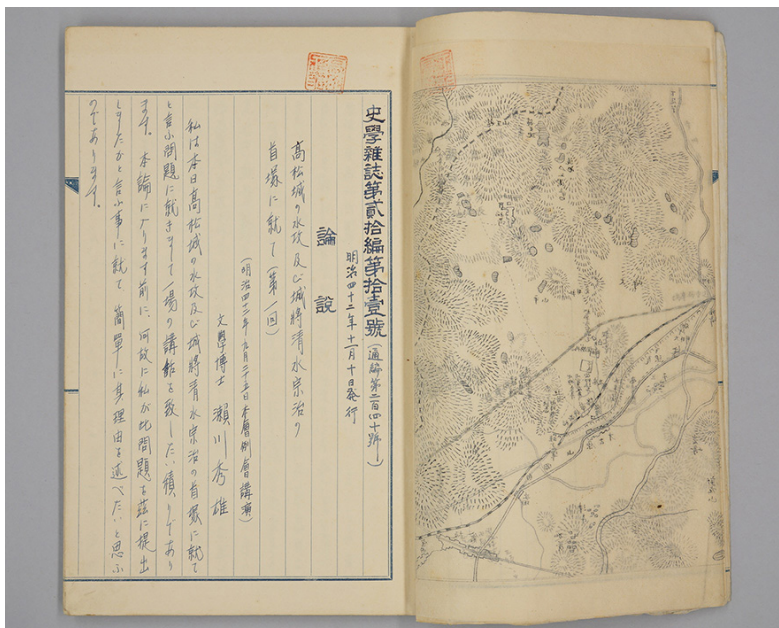
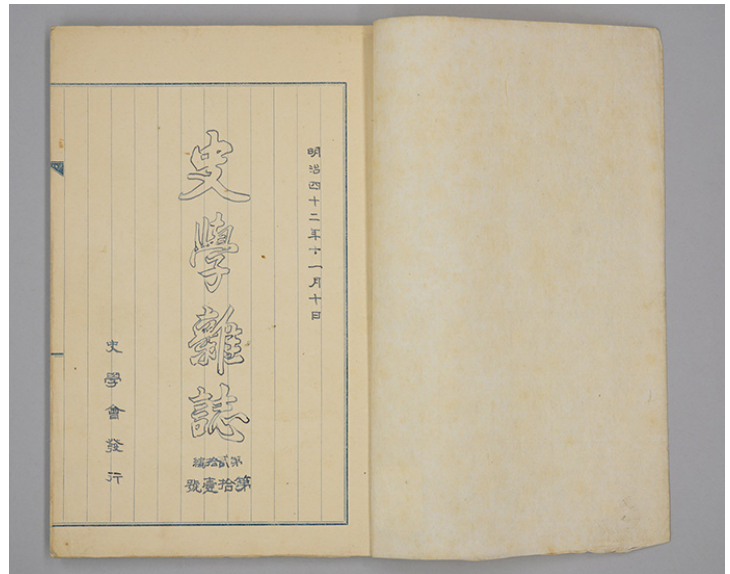
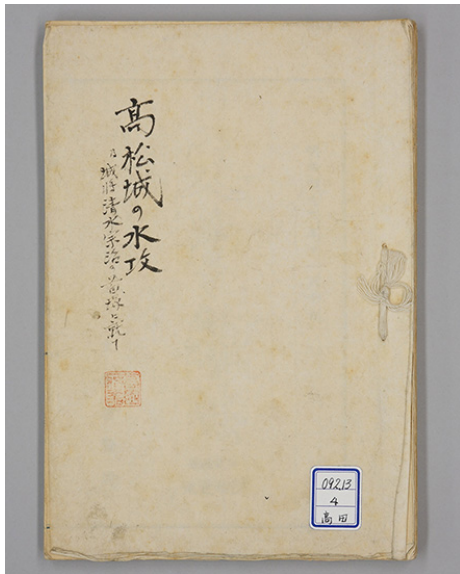


清水宗治の首塚

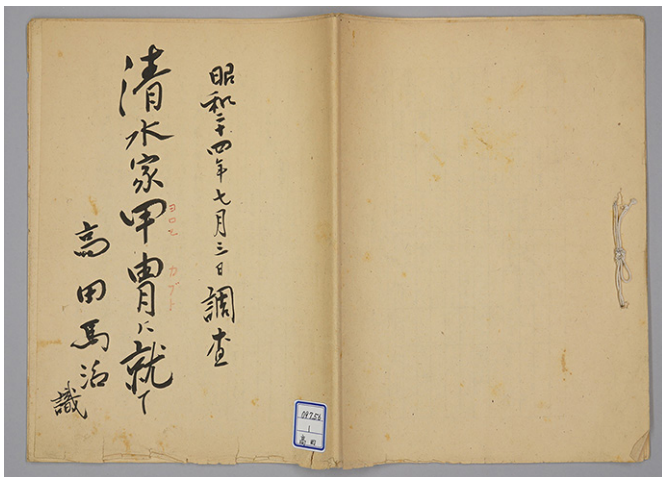
昭和 32 年 6 月以前撮影

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.89/37-3）

埋納物の埋め戻して整備される前に撮影された、高松城本丸跡にある首塚です。



10-1 瀨川秀雄（著）、高田馬治（写）  
 「高松城の水攻及び城將清水宗治の首塚に就て」『史学雑誌』第 20 編第 11 号  
 明治 42 年 11 月 10 日、史学会（発行）  
 23.8cm × 16.2cm 43 丁  
 岡山市立中央図書館蔵  
 （高田文庫 092.13/4）  
 秀吉の陣所跡と伝わる持宝院にあった石塔が、記録や埋納物の状況から清水宗治の首塚にほかならないことを論証しようとした瀨川博士の論文を、高田馬治が書写したものです。



10-2 高田馬治 (著)「清水家甲冑に就て」(手稿)

昭和 24 年 7 月 3 日調査 25.8cm × 36.5cm 10 枚  
岡山市立中央図書館蔵 (高田文庫 097.56/1)

清水宗治の子孫が山口県熊毛郡に建立した正義霊社に伝わる、宗治以来の清水家の歴代当主が用いてきた甲冑と鎧を調査した記録です。

正義霊社の甲冑と鎧

昭和 8 年 7 月以前の撮影 16.4cm × 11.8cm

岡山市立中央図書館蔵 (高田文庫 097.56/2-2)

高田馬治の書き込みに昭和 8 年 7 月 3 日の日付があるので、毛利家の旧臣を訪ねたときに関係者から贈られた写真とみられます。